

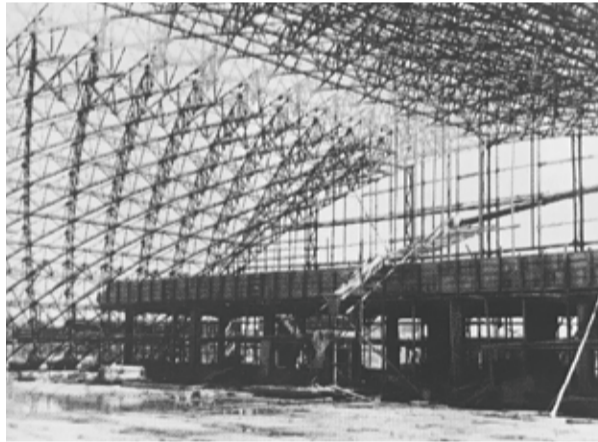
神宮外苑(青山)で35年、吉祥寺で35年 東京ボウリングセンター が70年の歴史に幕。

1987年(昭和62年)5月11日の開業以来、宿泊施設としてのみならず地域住民の社交場として長年親しまれてきた吉祥寺第一ホテル(東京都武蔵野市)が、3月31日をもって営業を終了。地下1階にあった「東京ボウリングセンター」も同時に閉鎖された。同センターの「前身」が、今から約70年前の1952年(昭和27年)12月20日、都内港区の神宮外苑に誕生した民間初のボウリング場であることは周知の事実。惜別の思いを込めて、いま一度その黎明期を振り返ってみる。

日本ボウリング史の起点

日本にボウリングが伝来したのは、江戸時代末期から明治時代初期にかけてのことと推察されている。しかし日本ボウリング史の実質的な起点といえるのは、やはり民間初のボウリング場として神宮外苑(青山)の旧・学習院女子跡地に東京ボウリングセンター(以下TBC)が開場した1952年(昭和27年)12月20日だろう。

利用された建屋の骨組には航空機格納庫の廃材(鉄骨)が



TBCの建設計画は、第二次世界大戦の敗戦国・日本がまだ連合軍の占領下に置かれて

いた1948年(昭和23年)ごろ、千代田区市ヶ谷にあったGHQ(連合軍最高司令官総司令部)のボウリング施設を視察して触発された増泉辰次氏(病院経営者)によって発案・提起された。

増泉氏は翌49年に株式会社日本ボウリング(後に「東京ボウリング」と社名変更)を設立。くだんの施設で知己を得た久保貞吉氏を片腕に頼み、ボウリング場建設にまい進していく。ま



▲1952年、開場前に撮られたTBC全従業員の記念写真(日本ボウリング振興協議会編「写真で見るボウリング」より)

TBCの建屋には、茨城県にあった航空機格納庫の廃材が使われた。場内にはホットドッグやハンバーガーのファストフード店、イタリアン・アイスクリームのミニ工場が備えられ、TBCは世間に最先端の欧米文化を紹介する情報発信基地でもあった。

ボウリング界のランドマーク

TBCは「スポーツの鹿鳴館」を目指して会員制を採用。著名なプロスポーツ選手や芸能人の社交場としてにぎわいをみせた一方、一般中流層には高額な入会金(個人3万円・団体5万円)が嫌われて正会員数は伸び悩み、7割近くを臨時会員扱い(入会金1万円)の外国人=米軍関係者が占めた。

当時のTBCは20レーンで、ピンセッターは手動式、スコアも手書きだったため、全従業員120人のうち、60人がピン

ボーイ(20人の3交代制)、英会話が堪能な女性30人がスコアガール(10人の3交代制)を務めた。手当はいずれも月額8000円と厚遇な上、米国式チップの恩恵もあって、懐はかなり潤ったという。

大卒サラリーマンの初任給が6000円前後だった時代の若者たちにとって、TBCは表向き羨望の職場といえたが、その実経営状態はひっ迫。53年11月には(株)第一ホテル(土屋計左右社長/当時はまだ駐留軍に接収されていた)に早くも経営権が移譲される。

同社の業務部(久保貞吉部長)が現場を統括する新生TBCは、経営改善に積極的な施策を講じていく。1954年(昭和29年)にはセンター内に高級レストランをオープンし、冷暖房設備も完備。前年に相次いで発足した学生ボウリング連盟、社会人ボウリング連盟がTBCを競技会の会場としたことも追い風となり、業績は徐々に向上していった。

55年2月には、極東に駐留する米軍人らが中心となって発足した国際ボウリング連盟(IBC)がTBC内に事務局を置き、同11月には初の国際大会「第1回IBCトーナメント」を開催。そんな環境下で日本人ボウラーもメキメキ腕を上げ、同大会ではTBCのピンボーイ・白石雅俊氏(現・日本ボウラーズ連盟理事長)が総合5位入賞を果たす。

さらに2年後の57年8月には、同じくTBCのピンボーイだった岩上太郎氏(JPBA1期生)が練習中ながら日本人初のパーフェクトゲームを達成。このニュースは全国紙でも報じられ、ボウリングの認知度がアップの一助となった。

そうした出来事の積み重ねもあって、オートマチックピンセッターの登場とボウリング場の建設ラッシュに沸いた60年代、空前絶後のブームが到来した70年代初頭も、TBCは変わらずにボウリング界のランドマークであり続けた。

ついに迎えた終焉のとき

しかし、1973年(昭和48年)末に招来した「オイルショック」以降はTBCも業績が悪化。閉鎖や売却が検討されたこともあったが、関係者の懸命な努力で持ちこたえ、神宮外苑の地で35年の歴史を刻んだ。

この間、一度改築された施設も老朽化が進み、87年、吉祥寺第一ホテルの開業とともに、同ホテルの地下1階へと移転された(レーン数は18に)。

移転当時の経営者だった(株)第一ホテルは2002年(平成14年)以降、他社との合併を繰り返し、近年は(株)阪急神ホテルズの傘下にあった。同社は21年度末に吉祥寺第一を含む6ホテルの営業を22年3月31日に終了することを決定、昨年7月に正式発表された。

閉鎖→売却の最大の理由は、長引くコロナ禍による業績悪化。現時点で売却先は公表されていないが、吉祥寺第一の関係者は「建物自体が取り壊されることはない」と聞いている。そうで、ボウリング場が名前を変えて存続する可能性は残っている。

たしかなのは、TBCが70年の歴史に幕を下ろすということ。何とも寂しく、切ない限りだが、その歴史とTBCに携わった人々の熱き思いは、これからも長く語り継がれていくことだろう。

参考資料: ボウリングマガジン(BBM社刊)87年7月号所載「イツザゲーム オブ ボウリング」(久保貞吉氏の寄稿文)/高田誠の「辛口独り言」(Webブログ)

2022年3月31日のTBC



▲1地下1階のボウリング場へ向かう階段の入り口②階段の途中に展示されている手動式ピンセッター。1952年の開業からオートマチックに切り替わるまで9年間使用された歴史的遺物で、今後の行き先が気になる③最終営業日の午後、場内の雰囲気は普段と何ら変わりなかった④ホテル1階のギャラリーでは「吉祥寺 街と第一ホテルの思い出」と銘打った回顧展が半年間にわたって開催され、ボウリング関連ではTBCの変遷をたどった写真パネルや、地元の成蹊中とコラボしたピンアートプロジェクトの作品が展示されていた